他力の仏道

藤　嶽　明　信

ただいま紹介いただきました大谷大学の藤嶽です。今回は「他力の仏道」という講題でお話をさせていただきます。親鸞聖人が顕されたことを「他力の仏道」に焦点を当てて尋ねたいと思います。お話しする内容を四章（Ⅰ：道が明らかになる、Ⅱ：仏道ということ、Ⅲ：他力による仏道・如来回向による仏道、Ⅳ：他力には義なきを義とす）に分けています。その順に従ってお話しします。

Ⅰ　道が明らかになる

第一章は「道が明らかになる」です。親鸞が開顕した仏道の起点は、法然上人との出遇いにあります。その出遇いとは、法然の教えによって、親鸞に道が明らかになったということです。そのことが『歎異抄』（第二章）には、

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また、地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもって存知せざるなり。たとい、法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。そのゆえは、自余の行もはげみて、仏になるべかりける身が、念仏

をもうして、地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたてまつりて、という後悔もそうらわめ。いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

（『真宗聖典』六二六～七頁）

と述べられています。法然との出遇いが述べられていますが、ここでは法然の教えを集約する形で、ただ念仏して阿弥陀仏にたすけられていきなさい、そのような教えであったと述べられています。そのただ念仏の教えを、親鸞は「いずれの行もおよびがたき身」という自身の身の気付きを通しながら、しっかりと受け止めていかれました。そこに新たな仏道の歩みの出発点がありました。

法然との出遇いは、恵信尼のお手紙、『恵信尼消息』にも記されています。そこには、

後世の助からんずる縁にあいまいらせんと、たずねまいらせて、法然上人にあいまいらせて、又、六角堂に百日こもらせ給いて候いけるように、又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありしに、ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば、上人のわたらせ給わんところには、人はいかにも申せ、たとい悪道にわたらせ給うべしと申すとも、世々生々にも迷いければこそありけめ、とまで思いまいらする身なればと、ようように人の申し候いし時も仰せ候いしなり。

（『真宗聖典』六一六～七頁）

と述べられています。法然が教えてくださったことは、ただ念仏の教えでありますが、そのことがこのお手紙のなかでは、「ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いし」と述べられています。法然の教えが「生死出ずべきみち」、みち（道）という言葉を使いながら示されていることに、随分印象深いものを感じるわけであります。それは「生死出ずべきみち」ですから、生死の迷いを超え離れていく道ということでありますし、先ほどの『歎異抄』（第二章）の言葉を重ねるならば、ただ念仏して浄土に往生するという「往生のみち」ということであります。それがここでは「生死出ずべきみち」という言葉を使いながら述べら

れています。親鸞がそれまで自身においては決して明らかにならなかったし、明らかにすることができなかった道が、法然との出遇いを通して初めて明らかになった。それが法然との出遇いであったと『恵信尼消息』では記されています。印象深い表現だと思います。

道というのは人が歩いていくところでありますから、そういうことで言うと、その人が歩いていくところが道でありますし、その人が歩いていく足下にしか道の具体性は無いわけであります。その道を教えて下さったのが法然である。法然によって教えていただいたその道において、親鸞は自身の生涯の全体を歩み尽くしていくことが出来た。生きることの全体、そして命終えていくことの全体を歩み尽せる道、生涯をかけて歩んでいくことができる道、その道が法然との出遇いにおいて明らかになったのである。そういうことではないでしょうか。人生にはさまざまなことがある。けれどもこの道においてそのなかを確かに歩み続け、そして命終わるということさえもその道において死に切っていける。そのような生涯の全体を尽くしていける、そういう道に出遇った。そのような道が明らかになった。そのような意味合いが「生死出ずべきみち」という言葉には感ぜられると思いまして、『恵信尼消息』の言葉を取り上げました。

それでその道の内容は具体的には念仏往生の道ですし、生死の迷いを超える道ですが、念仏の道に関して『歎異抄』の第七章には、

念仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報も感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なりと云々

（『真宗聖典』六二九頁）

と示されています。念仏、そして念仏者は、何ものにも碍げられないただ一筋の道である。そのような道が力強く示されるところに、道を見失った者、あるいは歩む道がわからない者にとって、直接的に訴えかけてくるような、そう

いう響きがあるように思われます。

Ⅱ　仏道ということ

第二章では道の上に仏という字を付けて仏道という言葉を用いています。それが今回の講題に挙げた言葉であります。道というその一字は大変印象深い言葉でありますが、道というのは迷いをこえていく仏道ということだけを意味する言葉ではありません。道という言葉はさまざまな意味で使われます。仏教のなかにおいても、三悪道とかあるいは六十二見九十五種の邪道とか、邪な道とか迷いの在り方も道という言葉を使いながら述べられます。そのように道という言葉は、迷いの在り方を示すところにも使用されますから、やはり迷いを超えていく道であるということを表す場合には、道の上に仏という字を付けて仏道と、こういう言葉がふさわしいということで講題にも「仏道」という言葉を掲げております。

これまでお話しのなかで仏道という言葉を何気無く使ってきましたけども、大体その仏道という言葉を見ていくと、その使われ方に大きく二つの使われ方や意味があります。一つは仏になる道、すなわちさとりに至る道。そこに至ることが出来る道であるという意味です。もう一つはさとりそのものという意味です。このような含蓄のある仏道という言葉が法然や親鸞において、どのような意味合いで用いられているのかを見ようと、幾つかの文章を取り上げました。はじめに法然による言葉を見ます。『西方指南抄』（「法然聖人御説法事」）には、

浄土者まづこの娑婆穢悪のさかひをいでて、かの安楽不退のくににむまれて、自然に増進して仏道を証得せむともとむる道也。

（『定親全』第五巻一〇〇頁）

と述べられています。「かの安楽不退のくににむまれて」とは、浄土に生まれてということです。「自然に増進して仏道を証得せむともとむる道也」の仏道とは、さとりそのもののことです。浄土に生まれて自ずから増し進んで、さと

りを証得するということです。これに対して「もとむる道」の道の方は、そのようにさとりを証得することを求める道という意味ですから、さとりに至る道という意味になるでしょう。「仏道」の方はさとりそのものを意味しますし、「もとむる道」の方はさとりに至る道を意味します。そういう使われ方をしています。次の文章も同じく『西方指南抄』（『法然聖人御説法事』）ですが、そこには、

曇鸞法師は、梁魏両国の無双の学生也。はじめは寿長して仏道を行ぜむがために、陶隠居にあふて仙経をならふて、その仙方によて修行せむとしき。

（『定親全』第五巻七八頁）

と述べられています。これは曇鸞大師について述べられたお言葉ですが、「はじめ寿長して仏道を行ぜむがために、陶穏居にあふて仙経をならふて」云々とありますように、曇鸞ははじめ寿を長らえることによって仏道を完成しようとされたと述べられています。この時の「仏道を行ぜむがために」の仏道とは、さとりに至る道です。それを実践しようとされたということです。このように法然においても、「仏道」という言葉がさとりそのものを意味して使用されている場合もありましし、一方ではさとりに至る道を意味して使用されている場合もあるわけであります。

次に親鸞の用例を見たいと思います。『教行信証』「信巻」に『大無量寿経』を引用して、

『大本』に言わく、かならず当に仏道を成りて、広く生死の流を度すべし、と。

（『真宗聖典』二四四頁）

と述べられています。「かならず当に仏道を成りて」の仏道とは、さとりそのものを意味しています。ですから文意は、必ず仏のさとりを開いて、広く生死の迷いの流れを超えるであろう、ということになります。次の用例は、同じく『教行信証』「信巻」に『安楽集』を引用して、

『大経』に云わく、「おおよそ浄土に往生せんと欲わば、発菩提心を須いるを要とするを源とす。」云何ぞ。「菩提」はすなわちこれ無上仏道の名なり。

（『真宗聖典』二四七頁）

と述べられています。「菩提はすなわちこれ無上仏道の名なり」の「無上仏道」とは、前に菩提と示されているよう

に、さとりそのものを意味しています。ですから文意は以下のようです。浄土に往生しようと願う者は、菩提心をもちいることが要であって、これが往生の根本である。なぜなら、菩提心の菩提とはこの上なくすぐれた仏のさとりのことだからである。以上、仏道に関して今見てきた二例はさとりそのものを意味している用例です。これに対して、さとりに至る道という用例を二例見てみます。最初は『尊号真像銘文』に、

「教有漸頓」というは、衆生の根性にしたがうて仏教に漸頓ありとなり。漸は、ようやく仏道を修して、三祇・百大劫をへて仏になるなり。頓は、この娑婆世界にして、このみにてたちまちに仏になるともうすなり。

（『真宗聖典』五二八～九頁）

と述べられています。「漸は、ようやく仏道を修して、三祇・百大劫をへて仏になるなり」の仏道とは、さとりに至る道のことです。仏に成る前の歩みの道です。文意は次のようです。漸とは段階を経てさとりに至る道を少しずつ修めて、三祇・百大劫という計り知れないほどの時間をかけて仏になるのである。次の用例は『浄土和讃』に、

相好ごとに百千の　ひかりを十方にはなちてぞ　つねに妙法ときひろめ　衆生を仏道にいらしむる

（『真宗聖典』四八二頁）

と述べられています。「つねに妙法ときひろめ　衆生を仏道にいらしむる」の仏道とは、さとりに至る道のことです。そこに衆生を導き入らしめるということです。

このように仏道という言葉の用例を見てきますと、法然も親鸞も、さとりそのものという意味合いで用いられることもありますし、またさとりに至る道という意味合いで述べられている場合もあります。そうするとその仏道という言葉は法然や親鸞においても一義的ではない。ただ一つの意味合いを意味しているのではないのだということです。複数の意味を有しているわけです。そういう意味で含蓄のある言葉だと思います。このような含蓄のある仏道という言葉を今回の講題に掲げました。それは、親鸞が顕してくださった他力の仏道・浄土真宗とは、一切衆生が必ずさと

りに至るというその道を顕して下さったという意味合いがあると共に、一切衆生がさとりそのものを得るという意味合いがある、このことをお尋ねしたいと思ったからです。すなわち他力の仏道とは、必ずさとりに至る仏道であるし、そしてさとりそのものを得る仏道である。このことをお尋ねしようと思いまして、他力の仏道という講題を掲げました。

Ⅲ　他力による仏道・如来回向による仏道

第三章の「他力による仏道・如来回向による仏道」に入ります。講題の「他力の仏道」とは、他力による仏道という意味です。そして他力による仏道とは、その具体的な内容から言うと如来回向による仏道だということを、この第三章で尋ねたいと思います。

他力という言葉でありますが、法然がお教え下さった念仏の教え、念仏して浄土に往生するという念仏往生の仏道は、その仏道の全体が自力によるものではない。念仏も往生も自力によるものではない。そのことが法然によって示されています。他力による浄土往生であるし、他力による念仏往生であり、他力の仏道であるわけです。

そのことが『和語灯録』（「念仏往生要義抄」）には、

> 問ていはく、称名念仏申す人は、みな往生すべしや。答ていはく、他力の念仏は往生すべし、自力の念仏はまたく往生すべからず。
>
> （『真聖全』第四巻五九一頁）

と述べられています。問答の問いは、称名念仏する人は全てが往生できるのですかと問うています。その問いに対して法然は、他力の念仏では往生できますが、自力の念仏では全く往生することができません、と答えています。そこに自力の念仏に簡んで他力の念仏ということが示されています。すなわち浄土往生を成立せしめる念仏とは他力の念仏であり、他力による念仏なのであると確かめられています。そして往生についても『西方指南抄』（「法然聖人御説法事」）に、

念仏を申て往生を願はむ人は、自力にて往生すべきにはあらず、ただ他力の往生也。（『定親全』第五巻八八～九頁）

と述べられています。往生も他力という言葉と関連づけられながら、他力の往生、他力による往生なのだというように示されています。このように他力による念仏、そして他力による往生ということですから、念仏往生の全体が他力によるものであることを、法然は述べておられるわけです。そのような他力による念仏往生ということは、言葉を換えて言うならば本願のはたらきによる念仏往生ということです。本願のはたらきによる念仏であるし、本願のはたらきによる往生であるということです。本願のはたらきによる念仏往生であるということが『和語灯録』（「諸人伝説の詞」）には、

本願の念仏には、ひとりだちをせさせて助をささぬ也。助さす程の人は、極楽の辺地にむまる。すけと申すは、智慧をも助にさし、持戒をもすけにさし、道心をも助にさし、慈悲をもすけにさす也。それに善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただむまれつきのままにて念仏する人を、念仏にすけささぬとは申す也。

（『真聖全』第四巻六八二～三頁）

と述べられています。本願の念仏は「ひとりだち」をなされて、そのほかの一切の助け、すなわち補助などを、付け加えることを必要としないのであると述べられています。補助などを一切介在させることなく、念仏のみで往生を成就するのである。その「助」に該当するものとして、智慧とか持戒とか菩提心（道心）とか慈悲などが取り上げられています。これらは私たちの常識からすれば、仏道が成り立つための欠くべからざる要件と思われる事柄なのではないでしょうか。それは聖道門だけではなく、往生浄土の仏道においても同じであると思われるのではないでしょうか。そのような私たちの思いを断ち切るかのように法然は述べているのです。智慧や持戒や菩提心や慈悲などの一切は、全く往生の要件とならないのである。本願の念仏、ただそのことによって全ての凡夫人が往生するのである。このように示されているのです。このような他力による念仏往生の仏道を、法然は本願の念仏とか選択本願の念仏という言

葉で繰り返し述べておられます。それは念仏往生という仏道の全体は、本願のはたらきによる本願の仏道であることを示そうとされているのでしょう。

本願念仏による往生浄土の仏道、そのような法然の教えに出遇ったのが親鸞ですが、法然の教えを継承しながら親鸞はそれをどのように確かめ、顕していったのか。そのことを見ていきたいと思います。親鸞は他力について『教行信証』「行巻」に、

しかれば真実の行信を獲れば、心に歓喜多きがゆえに、これを「歓喜地」と名づく。これを初果に喩うることは、初果の聖者、なお睡眠し懶堕なれども、二十九有に至らず。いかにいわんや、十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまわず。かるがゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力と曰う。

（『真宗聖典』一九〇頁）

と述べています。衆生が行信に帰命するならば、仏はその衆生を摂取して捨てられない。そのような摂取不捨のはたらきこそ阿弥陀仏と申し上げるのであり、これを他力と言うのであると示されています。行信に帰命するところに衆生が得るその摂取不捨の利益ということをもって阿弥陀仏、そして他力が確かめられているわけであります。他力について同じく『教行信証』「行巻」には、

他力と言うは、如来の本願力なり。

（『真宗聖典』一九三頁）

と述べられています。ここでは他力について非常に端的に「他力と言うは、如来の本願力なり」と示されています。先には衆生が得る利益をもって阿弥陀仏・他力が確かめられていましたが、ここでは「如来の本願力」、この言葉をもって他力が確かめられています。それではその如来の本願力とはいかなることであるのか。そのことを如来の回向ということで尋ねたいと思います。以下に、親鸞が如来の本願力を如来の回向と結び付けられながら述べる文章を幾つか見たいと思います。最初は『教行信証』「行巻」の「正信偈」の文ですが、そこには、

天親菩薩、論を造りて説かく、無碍光如来に帰命したてまつる。修多羅に依って真実を顕して、横超の大誓願を光闡す。広く本願力の回向に由って、群生を度せんがために、一心を彰す。（『真宗聖典』二〇六頁）

と述べられています。ここには「本願力の回向」という言葉があります。次は『教行信証』「信巻」の文ですが、そこには、

「能生清浄願心」と言うは、金剛の真心を獲得するなり。本願力回向の大信心海なるがゆえに、破壊すべからず。これを「金剛のごとし」と喩うるなり。（『真宗聖典』二三五頁）

と述べられています。ここでは「本願力回向の大信心海」と述べられています。次も『教行信証』「信巻」の文ですが、

しかるに『経』に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり。「信心」と言うは、すなわち本願力回向の信心なり。（『真宗聖典』二四〇頁）

と述べられています。ここでも信心について「すなわち本願力回向の信心なり」と、本願力回向という言葉が使われています。このように見ていきますと親鸞は、本願力を回向という言葉と結び付けながら表していることが分かります。それは本願力による回向という意味であります。先の言葉と重ね合わすならば、他力とは如来の本願力である。そしてその本願力の具体的な内容とは如来による回向である。このことを親鸞は顕そうとしていると言えるでしょう。

次の文からは、親鸞において回向が他力という言葉と密接に関係づけて述べられているところを見ていきたいと思います。『浄土三経往生文類』には、

如来の二種の回向によりて、真実の信楽をうる人は、かならず正定聚のくらいに住するがゆえに、他力ともうすなり。（『真宗聖典』四七一頁）

と述べられています。如来の二種の回向によって信心を獲得した人は、間違いなく正定聚の位に住するのであり、こ

のような事柄・はたらきを他力というのであると述べられています。次の『末燈鈔』には、

御たずねそうろうことは、弥陀他力の回向の誓願にあいたてまつりて、真実の信心をたまわりてよろこぶこころのさだまるとき、摂取してすてられまいらせざるゆえに、金剛心になるときを、正定聚のくらいに住すともうす。

（『真宗聖典』六〇八頁）

と述べられています。ここには「弥陀他力の回向」という言葉使いがあります。このように親鸞は、他力に関して回向をもって表し、回向と深い関係において他力を語っています。「行巻」の「他力と言うは、如来の本願力なり」という言葉と重ね合わせるならば、他力とは如来の本願力であり、そのことは具体的には如来回向である。そのことを親鸞は繰りかえし示していることが窺えると思います。

先程見た「いかにいわんや、十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまわず。かるがゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力と曰う」という文にも行信という言葉が示されていました。行や信というと、それぞれの人間による修行や信仰のように思われるかも知れませんが、実はそうではない。その行信こそが如来の回向であり、如来の回向によるものであることを親鸞は明らかにしていきます。先の文では「この行信に帰命すれば」と、行信に帰命すると述べられています。行信が如来回向によるものであり、如来のはたらきであるがゆえに、親鸞は行信を「大行」「大信」とか「真実行」「真実信」などと述べています。『教行信証』「信巻」には、

しかれば、もしは行・もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまうところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと。知るべし。

（『真宗聖典』二二三頁）

と述べられています。如来より回向されたその行信が往生成仏の因なのであって、それ以外に因があるのではない。そのことをよく知りなさい。このように行信そのものが如来による回向成就なのだと示されます。さらには、親鸞は大行大信の行信だけでなく教・行・信・証という、そのことの全体が如来の回向によるものであることを示していま

す。『教行信証』「証巻」には、

それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。かるがゆえに、もしは因もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまえるところにあらざることあることなし。因浄なるがゆえに、果また浄なり。知るべしとなり。

（『真宗聖典』二八四頁）

と述べられています。教・行・信・証という四法に関して因と果ということが述べられています。その因にあたるのが行信です。そしてその果とは、「証巻」に示されますように無上涅槃の極果であります。これは「証巻」の標挙の言葉で言うならば、「必至滅度（の願）」とか「難思議往生」に当たるわけです。これが果として示されているわけです。そしてその果が清浄であるのは因が清浄であるからである。このことをよく知るべきである。このように述べられています。

このような因が浄であるから果も浄であるという仏道の内容は、『三経往生文類』には、

大経往生というは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大経』の宗致とす。このゆえに大経往生ともうす。また難思議往生ともうすなり。

（『真宗聖典』四六八頁）

と述べられています。これは大経往生・難思議往生を語る文です。大経往生というのは、如来が選択された海のように深広で不可思議な本願のはたらきによるものであり、これを他力というのである。この他力による仏道が「これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり」と、まず因と果をもって表されています。そしてそのことの内容が詳しく「現生に正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大経』の宗致とす。このゆえに大経往生ともうす。また難

思議往生ともうすなり」と述べられています。先ほどの言葉と重ねるならば、行信という因においてこの現生において正定聚の位に住する。正定聚の位に住するとは、必ず往生すべき身と定まるとか、必ず仏となるべき身と定まるということです。そして正定聚の位に住するが故に必ず真実報土に至る。すなわち真実報土に往生し、無上涅槃のさとりをひらく。すなわち他力・如来回向によって、現生において正定聚の位に住し、それ故に必ず真実報土に往生する。その浄土に往生することをもって無上涅槃のさとりをひらく。このように大経往生・難思議往生が述べられているわけです。ここには仏道という言葉が持っている二つの意味合い、さとりに至る道と、さとりそのものを証得することが示されています。現生において、必ずさとりに至る仏道に入らしめられる。そしてその仏道においてさとりそのものとしての仏道を証得する。このことが「現生に正定聚のくらいに住して……無上涅槃のさとりをひらく」と述べられています。

先程の文には「無上涅槃のさとりをひらく」と述べられていましたが、『教行信証』「行巻」には、

しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵うなり。知るべし、と。

（『真宗聖典』一九二頁）

と述べられています。ここには無上涅槃のさとりをひらくところから展開する事柄が述べられています。「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す。」ここまでは先ほどの文章で語られていたことと同内容です。しかしそれに続けて「普賢の徳に遵うなり。」と述べられています。ここには大涅槃を証するところからの展開が述べられています。「普賢の徳」と表される慈悲によって衆生を教化する。普賢の徳に遵い、そのはたらきをあらわすものとなるということです。普賢の徳ということは、「還相の回向ととくことは　利他教化の果をえしめ　すなわち諸有に回入して　普賢の徳を

修するなり」（「曇鸞讃」『真宗聖典』四九二頁）という和讃などに述べられますように、還相の回向として示されています。文意は以下のようです。還相回向とは、（往生成仏の涅槃の果として）他の衆生を教化利益するはたらきを得しめ、諸々の迷いの衆生のなかに立ち返って、普賢の徳である大慈悲を修するのである。このように見てきますと、先程の「行巻」の文は、無量光明土に至って大涅槃を証するところから、さらに普賢の徳に遵うという展開、すなわち還相回向の内容が示されているわけであります。このことと同じ内容を平たい言葉で示したものが、

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし。浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうすのみぞ、すえとおりたる大慈悲心にてそうろうべきと云々　（『真宗聖典』六二八頁）

という、『歎異抄』第四章の言葉でしょう。念仏して浄土に往生して仏となって、そこに展開する大慈大悲心が、浄土の慈悲として語られているわけであります。

このように見てきますと、他力の仏道、如来回向の仏道は、豊かな内容をもっていることが顕わされているといえるでしょう。現生に正定聚の位に住することがありますし、必ず真実報土に至る。そして無上大涅槃のさとりをひらく。さらにはそこから普賢の徳に遵うという大慈悲の展開が示されている。こういうことの全体が如来回向の仏道の内容として示されているわけです。このように豊かな内容を如来回向の仏道として親鸞は語っているのであります。

これまで述べてきましたことを親鸞が集約的に示している文を見たいと思います。『教行信証』「教巻」には、

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。　（『真宗聖典』一五二頁）

と述べられています。浄土真宗という仏道の内実が往相回向、還相回向という如来による二種の回向によって示されています。そして往相の回向のなかに真実の教・行・信・証があると述べられています。また『浄土文類聚鈔』には、

しかれば、もしは往・もしは還、一事として如来清浄の願心の回向成就したまうところにあらざることあることなきなり。知るべし。

（『真宗聖典』四〇八頁）

と述べられています。往相も還相もその全てが徹底して如来清浄願心の回向成就によるものであると示されています。二種の回向として示される往相回向・還相回向ということの全体が如来回向による成就に他ならない。親鸞が顕す他力の仏道、如来回向の仏道とは、往相回向の内実としての真実の教行信証、そしてその証果から展開される還相回向。このように往相・還相という、豊かな内容を内実として持つ仏道が他力の仏道、如来回向の仏道である。このように示されていると言えるでしょう。

Ⅳ　他力には義なきを義とす

最後の第四章の見出しは「他力には義なきを義とす」としました。親鸞は他力を語るときに、繰り返し「義なきを義とす」と述べておられます。このように述べられることの意味を尋ねてみたいと思います。『血脈文集』には、

また、他力と申すことは、弥陀如来の御ちかいの中に、選択摂取したまえる第十八の念仏往生の本願を信楽するを、他力と申すなり。如来の御ちかいなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人のおおせごとにてありき。義ということは、はからうことばなり。行者のはからいは自力なれば、義というなり。他力は、本願を信楽して往生必定なるゆえに、さらに義なしとなり。

（『真宗聖典』五九四頁）

と述べられています。大体の文意は以下のようです。他力とは、阿弥陀如来が選び取ってくださった第十八の念仏往生の本願を信じることを他力というのである。これは如来の誓いを信じることであるから、他力においては行者によ

る計らいを離れることを本義とするのである、と法然上人は仰せになったのである。義ということは、計らうという意味の言葉である。行者による計らいは自力による計らいであるから、これを義というのである。他力においては、本願を信ずるところに往生が定まるのであるから、そこには行者による計らいはないということである。この消息のように、他力には自力による計らいがない、行者による計らいが雑らないのである、このことを親鸞は繰り返し述べています。それは、他力の仏道においては、この「義なきを義とす」ということが大変重要である。だから親鸞は繰り返し述べているのです。裏から見ますならば、「義なきを義とす」ということが私たちにはなかなか分からない、本当の意味では分からない。そういう問題があるということでしょう。だから親鸞は繰り返し示しておられるということでしょう。それでは行者による義とはどのようなことなのか。そしてどのようなこととして表れるのか。そのことを示している文を見たいと思います。『末燈鈔』には、

御ふみくわしくうけ給わり候いぬ。さては、ごほうもんのごふしんに、一念発起信心のとき無碍の心光にしょうごせられまいらせ候うゆえ、つねに浄土のごういん決定すとおおせられ候う。これめでたく候う。かくめでたくはおおせ候えども、これみなわたくしの御はからいになりぬとおぼえ候う。ただ不思議と信ぜさせ給い候いぬるうえは、わずらわしきはからいはあるべからず候う。……（中略）……ただ如来の誓願にまかせまいらせ給うべく候う。とかくの御はからいあるべからず候うなり。あなかしこ、あなかしこ。

五月五日　　親鸞（花押）

しょうしんの御ぼうへ

（『真宗聖典』六〇五～六頁）

他力と申し候うは、とかくのはからいなきを申し候うなり。

と述べられています。これは「御ふみくわしくうけ給わり候いぬ」と述べられるように、門弟が法門のことで質問したことに対して、親鸞が答えたお手紙です。法門について詳らかでないところを親鸞に尋ねてきたのです。その尋ね

てきた手紙のなかに門弟による了解が「一念発起信心のとき無碍の心光にしょうごせられまいらせ候うゆえ、つねに浄土のごういん決定す」と書かれていたわけです。この了解の内容は、親鸞の教えをよくまとめている内容になっています。信心が発起するときに無碍光如来の光のなかにおさめられて、平生において往生の業因が定まるのである。「つね」というのは平生という意味です。臨終ではなく信心発起の平生に往生の業因が決定するという了解ですから、間違ったところはない了解なのでしょう。そういう意味では正解であり、正答なのでしょう。ですから親鸞も「これめでたく候う」と、結構なことだと一応述べます。しかしながらその直後に「かくめでたくはおおせ候えども、これみなわたくしの御はからいになりぬとおぼえ候う」と非常に厳しいことを仰います。その了解の内容が間違っているというのではない。しかしながら、その了解の全体が私のはからい、自力のはからいになっているかと思います、このように親鸞は仰っています。例えば、一般的な学びであれば、正解や正答を学べば充分なのではないでしょうか。しかし仏道の学びにおいてはそうはいかないのでしょう。それゆえに親鸞は「ただ不思議と信ぜさせ給い候いぬるうえは、わずらわしきはからいはあるべからず」と述べられます。阿弥陀仏のお救いは私たちの思議を超えたものであると信じられたうえは、あれこれと計らいがあってはなりません、と述べられています。思議を超えた阿弥陀仏のお救いを自分の思議をもって了解し、自分の見解を打ち立てていく。そしてそのような了解や見解によって救われていくように思う。それは大いなる間違いなのである。そのような自分の了解や見解によって救われるのではない。他力・本願力といわれるように、徹底して如来のはたらきによって救われていくのである。このことを親鸞は伝えようとしているのでしょう。

このことは『歎異抄』の第一章にも、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。

（『真宗聖典』六二六頁）

と述べられています。「弥陀の誓願不思議にたすけまいらせて」と、たすけられるというのは、如来の誓願不思議にたすけられていくのであると述べられています。ですから人間が何らかの了解や見解をもって、たとえそれが見事な了解や見解であろうとも、そういうことによって救われるのではないのである。救いというのはあくまでも「弥陀の誓願不思議」といわれますように、思議を超えたはたらきによって救われていくのである。それゆえに、阿弥陀仏の救いは私たちの思議を超えたものであると信じられた上は、あれこれと計らいがあってはなりません、と述べられているのです。先程の『末燈鈔』の結びのあたりでは「他力と申し候うは、とかくのはからいなきを申し候うなり」と、計らいがないこと、これが大事だと親鸞は述べています。このことを集約して表しているのが「他力には義なきを義とす」という言葉でしょう。そしてこの「他力には義なきを義とす」という言葉を親鸞は、法然の大切な仰せとして聞き取っているのです。その上でそのことが『歎異抄』第十章には、

「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそうらいき。（『真宗聖典』六三〇頁）

と述べられています。「義なきを義とす」、自力の計らいが雑わらないということが他力の仏道の要なのです。ですから仏道を学ぶということは、自分の了解や見解を固めることで救われるかのように思い込んでいくことではない。逆に、学ぶことによって自分の思い込みや計らいなどの自力の心を離れていくことである。そのことが『教行信証』「化身土巻」には、

「横超」とは、本願を憶念して自力の心を離るる、これを「横超他力」と名づくるなり。これすなわち専の中の専、頓の中の頓、真の中の真、乗の中の一乗なり、これすなわち真宗なり。すでに「真実行」の中に顕し畢りぬ。

（『真宗聖典』三四一～二頁）

と述べられています。阿弥陀仏の本願を聞思し、本願を信じて自力の心を離れていくことが横超他力なのです。このことに留意しながら信心の自覚内容を表した二種深信の文を見たいと思います。『教行信証』「信巻」に引用されてい

るものですが、そこには、

「二者深心」。「深心」と言うは、すなわちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには決定して深く、「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。二つには決定して深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。

（『真宗聖典』二一五～六頁）

と述べられています。機の深信は、自身についての深い目覚めです。生死の迷いを出離する根拠などは如何なる意味においてもないという自身への決定的な目覚めです。それを受けながら示されるのが法の深信です。法の深信とは、阿弥陀仏の本願は衆生を摂め取ってお救いくださると、疑いなくためらうことなく本願のはたらきに乗託して、必ず往生するのであると深く信じることです。だからそれは阿弥陀仏の本願のはたらきへの決定的な目覚めです。ここにも「疑いなく慮りなく」と、自力のはからいを離れて信じることが要点として示されていることに留意すべきであろうと思います。疑いや慮りという自力の心を離れて本願力を信じるところに救いの道が開かれてくる。しかしその自力の心とは根深いものとしてあるのでしょう。先程の『末燈鈔』で見たように、他力の教えを学ぶことによって分かってくることがある、そうすると分かることによって救われていくように思われてくる。そこには自力の計らいがある。そのような私たちの根深い問題に対して親鸞は、「弥陀の誓願不思議にたすけられて」と、救いとは徹底して阿弥陀のはたらきによってたすけられていくのであり、他力により救われていくのである、このように示してくださっているのだと思います。弥陀の誓願不思議にたすけられてそして往生を遂げるのである、このことを顕かにするために親鸞は繰り返し、「他力には義なきを義とす」ということを示されているのだと思います。これは他力の仏道を学ぶ上において、とても大事な教えであると思います。

「他力には義なきを義とす」という言葉を念頭に置きながら再度『歎異抄』第二章の文を見てみます。「親鸞にお

きては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」。そこには「ただ念仏」と示されています。『一枚起請文』には、

もろこし、我がちょうに、もろもろの智者達のさたし申さるる観念の念にも非ず。又、学文をして念の心を悟りて申す念仏にも非ず。ただ、往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思とりて申す外には、別の子さい候わず。

（『真宗聖典』九六二頁）

と述べられています。それは「観念の念にも非ず」「念の心を悟りて申す念仏にも非ず」と述べられるように、まさしく「ただ念仏」の仏道なのでしょう。そして「（ただ念仏して、）弥陀にたすけられまいらすべし」と述べられるように、徹底して阿弥陀にたすけられていく仏道です。このような「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という法然の教えに親鸞は決定的な出遇いをしたのです。「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。」これは端的な言葉ですが、法然の教えの大事な事柄が集約して語られているように思われます。そしてただ念仏して弥陀にたすけられていく仏道、その他力の仏道において要となる「他力には義なきを義とす」ということも法然が教えてくださったのです。このように見てきますと、親鸞は繰り返し法然の教えを聞思しながら他力の仏道を顕していることがよく窺えるのではないかと思います。

法然の教えとの決定的な出遇いの上に親鸞は、他力の仏道を如来回向の仏道、本願力回向成就の仏道として開顕していきました。その仏道は現生に正定聚の位に住し、そして浄土に往生して無上大涅槃をさとる。さらにはそこから「普賢の徳に遵う」という還相までも展開する仏道である。このことを親鸞は『教行信証』等の書物を通して示してくださいました。このようなことをお尋ねしたいと思いまして、今回「他力の仏道」と題してお話させていただきました。ご静聴、有り難うございました。